

二つの、ブルターニュの詩

Zwei bretonische Gedichte

漆 谷 克 秀

Katsuhide Urushidani

Abstract

Paul Celan schrieb zwei Gedichte, die den Ortsname „Bretagne“ in ihren Titeln haben. Diese sind „Bretonischer Strand“ (1954) und „Matière de Bretagne“ (1957).

Am 23. Dezember 1952 hatte Celan sich mit Gisèle de Lestrange verheiratet. Am 6. Juni 1955 wurde sein Sohn Eric geboren. Celan hatte zum erstenmal das Glück, eine Familie zu besitzen. Vielleicht war die Zeit, Mitte der 50er Jahre, für ihn eine glückliche Periode. Celan bemühte sich auch, dieses Leben aufrecht zu erhalten.

Im Gedicht „Bretonischer Strand“ wird der Abschied vom bisherigen Selbst besungen. Der Grundtenor des Gedichts ist der Ausdruck der reinen Freude über das Zusammenleben mit Gisèle. Die Hauptsache war für ihn dieses neue Leben.

In der ersten Strophe und der zweiten Strophe des Gedichts „Matière de Bretagne“ werden seine Matière gezeigt. In der dritten Strophe treten „Hände“, die Gedichte schreiben, auf. In der vierten Strophe treten diese „Hände“ in die Matière der ersten Strophe hinein und reorganisieren diese Matière. Das zeigt den Prozess, das Gedicht zu erneuern. Von „Händen“ werden die Wörter dieses Gedichtes durchschnitten, und ihre Kontinuität geht verloren. Das Gedicht besteht nur aus den Bruchstücken der Wörter. Das weist auf die Konzeption des Dichtens in Celans späteren Jahren hin.

I. はじめに

1961年7月上旬から9月5日まで、ブルターニュ (Bretagne) 地方のル・コンケ (Le Conquet) 近郊のトレバブ (Trébabu) で、パウル・ツェラーン (Paul Celan) は家族とともに休暇を過ごした。その時に書かれた九つの詩が「ブルターニュ連作詩」¹ (Bretonische Zyklus) と呼ばれて、詩集『誰でもないもののバラ』 (Die Niemandrose) に収められている。この年の秋に、ツェラーンは重い精神障害に陥る。「ゴル事件」が発端になっているのだが、このことを考えれば、この「連作詩」には、ツェラーンにとって、内に秘められていた狂気との出会いを記するものが含まれているのではないか、と思われてくるのである。

それ以前に、「ブルターニュ」という語が冠せられた詩が二篇ある。ひとつは、詩集『関から関へ』 (Von Schwelle zu Schwelle) に収められた「ブルターニュの海岸」 (Bretonischer Strand) であり、もうひとつは、詩集『言葉の格子』 (Sprachgitter) に収められている「ブルターニュのマティエール」 (Matière de Bretagne) である。「ブルターニュの海岸」は1954年の秋に成立している。1954年9月23日以降のある日に、マルチン・ハイデガー (Martin Heidegger) の『形而上学入門』 (Einführung in die Metaphysik) の読書ノートに書き込まれている²。また、「ブルターニュのマティエール」は、1956年8月4日の日付のうたれた最終行がメモ帳に記されており、その後最初に最初の詩節が生まれて、改稿されながら、1957年10月8日に最終稿が成立している³。

1952年12月23日に、ツェラーンはジゼル・ド・レストランジェ (Gisèle de Lestrange) と結婚している。翌年、長男フランソワ (François) が、誕生後まもなくして死ぬという不幸はあつ

だが、ツェラーンにとっては、比較的幸福な時間を過ごした時期でもあったと考えられる。本稿では、上述の二つの詩を取りあげて、50年代中期のツェラーンとツェラーンをめぐる空気を考えてみたい。

II. 「ブルターニュの海岸」について

BRETONISCHER STRAND

- 1 Versammelt ist, was wir sahen,
zum Abschied von dir und von mir:
das Meer, das uns Nächte an Land warf,
der Sand, der sie mit uns durchflogen,
5 das rostrote Heidekraut droben,
darin die Welt uns geschah. ⁴

ブルターニュの海岸

集められてある、ぼくたちが見たものが
おまえに そしてぼくに 別れを告げるため。
夜々をぼくたちの陸にほり投げた海、
夜々をぼくたちとともに飛んで通り抜けていった砂、
砂地の上の赤さび色のヒース、
そのなかで世界がぼくたちに生起する。

先述したように、この詩は1954年の秋に、9月23日以降に成立している。ツェラーンは、ブルターニュを旅行した後、マルセイユ (Marseille) 近くのラ・シオタ (La Ciotat) に行き、9月19日から10月30日までその地に滞在している。この詩は、10月19日までにラ・シオタで成立したと推測されている⁵。

この詩の最初のタイトルは「トゥーランゲの海岸」(Plage du Toulinguet)となっていた。ツェラーンは1954年8月29日から9月9日までブルターニュ地方を旅行しており、ジゼルのカレンダーの9月1日の下には「トゥーランゲ岬」(Pointe de Toulinguet)⁶と書き留められている。この海岸は、大西洋に突きだしたクロゾン (Crozon) 半島の先端にある「トゥーランゲ」(Le Toulinguet)と呼ばれる岩礁群と向かい合っているペンーハ湾 (Anse de Pen Hat) の海岸である。そこは、断崖になっている「トゥーランゲ岬」と「ペンーヒール岬」(Pointe de Pen Hir)にはさまれ、常に強い風が通り抜ける遊泳禁止の美しい白砂の海岸である。また、海岸の後背地は、砂が吹き上げられた岩の急な傾斜地になっており、岩と砂地の上には一面、低木のヒー

スが広く生い茂っている⁷。ツェラーンは、夜に、この海岸に立った、おそらく満天の星空の下で。そのような気がする。

この詩でまず目につくのは、一人称複数の人称代名詞である。第一詩行の“wir”（一格）、第三詩行、第四詩行、第六詩行の“uns”（三格）がそれにあたる。また、第二詩行に一人称単数の“mir”（三格）と二人称単数の“dir”（三格）が措辞され、「我」と「汝」で“wir”ということにもなろう。このことはこの詩の解釈にも係わってくることであろう。“mir”と“dir”に巧みに分けられてはいるが、“wir”が意識されていると考えられる⁸。

この詩について、飯吉光夫氏は、その訳業の解説において、簡単に次のように記している。「おそらく作者が妻ジゼルと過ごしたブルターニュ海岸での思い出⁹と。「ぼく」がツェラーン自身を、「おまえ」がジゼルを指し示すことは間違いないであろう。しかし、「思い出」としてだけの詩であろうか。それ以上に、ツェラーン自身の生活を変えようとする意志が見いだされるのである。1952年12月23日にジゼルと結婚したツェラーンは、自己の生活を変えていかなければならない感慨を抱いていたのではないだろうか。そしてそれは、ジゼルについても同じことがいえたのであろう。今までの自分との訣別、おぞましい過去との訣別をツェラーン自身が求め、そして、ツェラーンと生活を共にしていくジゼルに対しても今までの生活との別れを求めているのであろう。「ぼくたち」として「見たもの」が、この時のツェラーンにとっては、身を寄せる集積されたところのものになっていたし、これからの生活の拠り処とする彼の決意を示しているように考えられる。

第三詩行から第五詩行は、第六詩行「世界がぼくたちに生起する」モメントになっている。「夜々」（Nächte）と複数形が使われているのをどのように考えればよいのか。夜の空は、月も出た満天の星空のように思える。海の面にその夜空が反映し、大きな強い波に、「夜」が繰り返し「ぼくたち」の立つ陸へと打ち寄せられている、そんな光景が筆者には想像される。この「夜」は否定的な事象とは思えない。また、その「夜」の中を「砂」が飛び抜けていくのである。「飛ぶ砂」は現実の体験であったかもしれない。「飛びゆくもの」が、しばしば時間性のメタファーになって、無常なことを暗示させることも多い。しかしここでは、「ぼくたちとともに」飛んでいくのである。この飛翔は、苦しみからの救済への飛翔であり、ツェラーンの願望そのものを示している。そして、「砂」のたどり着いたところには、低灌木のヒースが広がり、そこに二人は立っているであろう。自然と自我との総体の中で、「ぼくたち」という把握しかない。「ぼくたち」のための世界が生起し、生成していく舞台ができあがってきたのだ。

この旅行にジゼルは同伴していなかったようだ。その後、ツェラーンは、パリではなく、直接ラ・シオタに赴き、9月11日から10月30日まで夫婦で当地に滞在している。このラ・シオタ滞在は、ツェラーンにとって快い休暇であったようだ。マルチン・ハイデッガーの著作の熟読とともに、「シボレート」（Schibboleth）などの詩が生まれている。

Ⅲ. 「ブルターニュのマティエール」について

MATIÈRE DE BRETAGNE

- 1 Ginsterlicht, gelb, die Hänge
eitern gen Himmel, der Dorn
wirbt um die Wunde, es läutet
darin, es ist Abend, das Nichts
5 rollt seine Meere zur Andacht,
das Blutsegel hält auf dich zu.

- Trocken, verlandet
das Bett hinter dir, verschliff
seine Stunde, oben,
10 beim Stern, die milchigen
Priele schwatzen im Schlamm, Steindattel,
unten, gebuscht, klafft ins Gebläu, eine Staude
Vergänglichkeit, schön,
gerüßt dein Gedächtnis.

- 15 (Kanntet ihr mich,
Hände? Ich ging
den gegabelten Weg, den ihr weist, mein Mund
spie seinen Schotter, ich ging, meine Zeit,
wandernde Wächte, warf ihren Schatten — kanntet ihr mich?)

- 20 Hände, die dorn-
umworbene Wunde, es läutet,
Hände, das Nichts, seine Meere,
Hände, im Ginsterlicht, das
Blutsegel
25 hält auf dich zu.

Du
du lehrst
du lehrst deine Hände

du lehrst deine Hände du lehrst
30 du lehrst deine Hände
 schlafen¹⁰

ブルターニュのマティエール

エニシダの光、黄色く、斜面は
天に向かって膿む、茨は
傷を求める、そのなかで
鐘が鳴る、夕べだ、無が
その海を 祈りへと転がす
その血の帆がおまえに向かって進む。

干からびて、おまえの背後で
河床が埋まって陸になる、その時刻は
葦で覆われる、上で、
その星のところで、乳状の、
細流が泥の中でおしゃべりをしている、胎貝が
下で、茂みとなって、青空にパツクリと口を開ける、一本の宿根草ほどの
移ろいやすいものが、美しく、
おまえの記憶に挨拶をする。

(おまえたちは ぼくのことを知っていたのか、
両手よ？ ぼくは行った
分岐した道を、その道をおまえたちが示したのだ、ぼくの口は
その道の砂利を吐き出した、ぼくは行った、ぼくの時は、
さまよう雪庇は、影を投げる — おまえたちはぼくのことを 知っていたのか?)

両手、茨の—
求めた傷、鐘が鳴る、
両手、無、その海たち、
両手、エニシダの光の中で、その
血の帆が
おまえに向かって進む。

おまえは

おまえは教える
おまえはおまえの両手に教える
おまえはおまえの両手に教える おまえは教える
おまえはおまえの両手に教える
眠ることを

先述したように、この詩は1956年8月4日から1957年10月8日の間に改稿されながら成立していった。『チュービンガー版』では、「歌」(Gesang)という副題が添えられた初稿と、1957年5月17日、同年の8月9日、8月10日の草稿、そして最終稿がとられている¹¹。初稿は、最終稿の第一詩節と最終詩節にあたる箇所が記され、この時には既に、この詩の枠組だけは、不完全ながらも、一応成立していたのであろう。しかし、そのままにしておかれたようだ。『注釈版』で、ヴィーデマンは「1957年4月26日から5月1日まで、フランス西海岸のケルト文化の刻印を受けた地方に行った」¹²と記している。そして、先のメモに抛りながら、1957年5月17日の稿から、この詩が作り始められたことも述べられている。

ベルンハルト・ベッセンシュタイン (Bernhard Böschstein) の注釈に拠れば、1957年の四月末に、妻ジゼルの母親が生活していたブレストの修道院に、ツェラーンの家族は6日間滞在していた。その後、引き続いて、この詩が成立した、としている¹³。ブレスト滞在中に、アーサー王伝説の土地やケルト文化の痕跡をとどめる土地を、ツェラーンは訪れていたであろう。また、『チュービンガー版』には収められていないが、同年の8月13日のタイプ原稿には、妻ジゼルのドイツ語レッスンのために、ツェラーン自身がフランス語に翻訳した単語リストがのっている¹⁴。

最終稿の最終詩節には、句読法が施されていない。この詩は先ず、ミュンヘンで発行されている雑誌『アクツェンテ』(Akzente)の5巻(1958年)1号(2月)に掲載された。第二十八詩行目が欠け、最後のピリオドは付いていた。ツェラーンが校正した後に欠けたらしく、印刷のミスであったらしい¹⁵。しかし、詩集『言葉の格子』に収める際、どうしてツェラーンは、この詩の最終詩節に句読法を施さなかったのか？むしろ、取り去ったと考えた方がよいであろう。

ベッセンシュタインの注釈には、1962年5月27日のツェラーンがベダ・アレマン (Beda Allemann) に宛てた手紙があげられている。それによると、この詩はアーサー王伝説の死者の国「アヴァロン」(Avalun)がテーマとしての親近性を生み出していることと、1954年のブルターニュ滞在のことを、「クロゾンの思い出」と呼んでいることも記されている¹⁶。タイトルの“Matière”には、アーサー王伝説を素材として、また、ブルターニュの海岸の石や泥などの形而下の事物、「膿む」(eitem, V.2, 詩行をV.で表示)で示される題材などが用いられている。このようなブルターニュの具体的な風景に結びついて、キリスト教的なモチーフが内包されているのである。

しかし、第三詩節からは「両手」(Hände, V.16, 20, 22, 23, 28, 29, 30)という語が頻繁に用

いられている。“Hände”は複数形である。第五詩節から考えれば、それらは詩人の両手をさし、それは、「試作」する「手」のことを示すのであろう。第三詩節だけが過去を表す時称になっていることも考え合わさなければならない。

エニシダは、「茨、茨の一」(V.2, 20)に関連して、幹に多数のトゲをもち、葉もトゲ状になっているものもあるハリエニシダである。乾燥した荒地や砂地(ヒース)によく生え、4月から7月にかけて黄色い花を咲かす。「エニシダの光」(V.1, 23)は、花を咲かせたエニシダを指すのであろう。そして、トゲをもつ植物と「光」を結びつけるものは何か、というような疑問もおこる。しかし、群生して咲きほこるエニシダの写真をみると、その黄色い花から「光」を思い起こさせても不思議ではない。

ベッセンシュタインは、聖書と結びつける意図を、‘gegen’の代わりにその短縮形で雅語である‘gen’(V.2)という前置詞が使われていることに見ている¹⁷。この「斜面」(V.1)は、花の咲いたエニシダに覆われているのであろうか。「天に向かって」(gen Himmel, V.2)が聖書の言葉である。モーゼが手を差しのべ、杖を差し出した「天」に向かって、黄色い「エニシダの光」は「膿む」(eitem, V.2)のである。「膿み」になっていく「傷」(die Wunde, V.3)を求める次の詩行への橋渡しになっているとも考えられる。しかし、“eitem”という語を使うことで、宗教的な意味を有するであろう「天」が、貶められ、汚されているようにも感じられてくるのである。「茨」は、キリストの茨の冠(Dornenkranz)、荊冠を呼び起こさせる。“der Dorn / wirbt um die Wund”(V.2-3)という表現にはセクシャルなニュアンスが含まれているのであろう。茨の冠のキリストは信仰の対象であり、茨によってでき、化膿した傷の脈打つ痛みが「鐘が鳴る」(es läutet, V.3)で示されている。それはまた、「夕べの祈り」の時を示すことにもなる。しかし、この「祈り」へと転がしていくのが「無」(das Nichts, V.4)である。ベッセンシュタインは、伝統的なキリスト教的な宗教心とは逆の意味にこの「祈り」はある、という。つまりここでは、ニヒリスティックな「祈り」が呼び覚まされているのである。「その(無の)海」(seine Meere, V.5)は複数形である。幾重にも寄せては引いていく海そのものを「転がす」のは、同じ言葉が次々とうねるようになって続く連禱を見立てているのであろうか。滞在していた修道院での勤めとしての「夕べの祈り」からの表現かもしれない。

“das Blutsegel hält auf dich zu”(V.6)では、ベッセンシュタインは、「トリスタンとイゾルデ」の伝説をとりあげている。イゾルデが同乗しているかどうか、トリスタンに帆の色で知らせることになっており、帆の色での虚偽の知らせによって、結局、トリスタンは死ぬことになる。この詩行において初めて現れる「おまえ」(dich)は、「死」を示すことになる。「死」が船の方向舵のとり目標となっているのである。帆の血の色は、茨がつけた傷や夕映えの海の光景とも結びついている¹⁸。先に挙げたベーダ・アレマン宛の手紙には「ブルターニュの海人の赤い帆」(die roten Segel der bretonischen Fischer)への想い出が述べられている。「赤い帆」を、ツェラーンは実際に見たのである。

第二詩節に入ると、‘oben’(V.9)と‘unten’(V.12)という逆の方向を示す副詞が目につ

く。また、‘St-’や‘Sch-’で始まる単語が多いこともわかるであろう。

第一詩節で「転がす」ように寄せていた「海」は退いて、第二詩節では先ず、干潮の海岸の光景が示されている。海水が退いたところは乾いて陸になっていく。「おまえの背後」(hinter dir, V.8)の「おまえ」は、先に詩節からすると「死」を意味することになる。「その時刻」(seine Stunde, V.9)の‘sein’は‘das Bett’を示している所有冠詞であり、陸となったところには、どのような時刻が刻み込まれているのであろうか？ 葦に覆われて見えないのであろう。‘Stunde’は‘Staude’(V.12)と、類似の音で結びつき、干潟の様相を示すことになる。「上で / その星のところで」(oben, / beim Stern, V.9-10)は、「天」のことを指す。ツェラーンは、「天の川」にも潮の干満を見ているのであろうか。干潮の時に浅瀬で退いていく潮とともにできる「細流」(Priele, V.11)が、「泥」(Schlamm, V.11)の中を流れる。そこには「貽貝」(Staindattel, V.11)もいるらしい。「泥の中でおしゃべりをしている」(V.11)は、干潟を歩いた体験から発せられている。干潮時に細流となって退いていく潮に、「ピチャピチャ」というような「おしゃべり」が実際に聞こえてくるのである。‘Steindattel’を文字通りに訳せば、「石のナツメヤシ」ということになる。ナツメヤシは楕円形の実をつける。ここでは、二枚貝で、楕円形の貽貝の一種を指すのであろう。ベッセンシュタインの注釈によれば、その貝は石灰岩に穿孔して生活をしている。そのなかには、ムール貝といわれて、ヨーロッパでは食用に供せられているものもある。「上で」はこの貽貝も生きているのであろう。しかし、「下で」は、空の中へと口を開けている。この貝は、重なるようにかたまって同じ岩礁に付着して生活することが多く、「茂みとなって」(gebuscht, V.12)という表現は、そのような状態を示すのであろう。その植物的な形姿が、「一本の宿根草」という語を呼び起こすことにもなる。この貽貝は、口をパツクリと開けている。この貽貝は死んでいるのだ。岩礁にへばりついて、「宿根草」のように次によみがえることが可能なのだろうか。「移ろいやすいもの」(Vergänglichkeit, V.13)が「宿根草」のように根に残り、「記憶」(Gedächtnis, V.14)としてよみがえることを願っているのだらう。

第三詩節では、「両手」(Hände, V.16)が「おまえたち」(ihr, V.15,19)という二人称複数の人称代名詞で受けられている。この後、この詩は「両手」という語を中心にして展開されていることが判る。ベッセンシュタインの注釈によれば、この「両手」には「詩を書くこと」(das Schreiben des Gedichts)が委託されていて、「両手」が「眠る」ときに詩が終わる、とされている。また、「分岐した道」(den gegabelten Weg, V.17)は手の「生命線」のことをいい、分岐した二つの道を行くことは「疑念を抱き続ける」ことと、ベッセンシュタインは解釈している¹⁹。

筆者には、人が、いつかどこかで、その人自身の生命と直面する人生の、あるいは生活の岐路を、この“den gegabelten Weg”は示しているように思えた。人は、選択しなければならぬ局面にいつも立つ。そこで選んだ道をその人は歩いていくことになる。そのような時間性を感じるとともに、もしかすると、選んだ道が通れない道であることもある、というように思えた。しかし、その道を「両手」が、「詩を書くこと」が「わたし」に示したのであり、

ツェラーンにとって、たとえ通れなくても歩んでいかなければならない「道」なのである。この道の「砂利」は「ぼくの口」が吐き出したものであり、「砂利」は詩の言葉と考えられる。なんと硬い言葉であろう。言葉を「砂利」といわずにしなければならないこの比喻には、多くの意味とツェラーン自身の生活の感慨が含まれているようである。

そして、「ぼくの時」(meine Zeit, V. 18)に「さまよう雪庇」(wandernde Wächte, V. 19)という比喻が与えられている。「雪庇」は吹きだまりに垂れ下がっている雪の塊であり、いつ落ちてくるのかも判らない不安定なものである。そのような「さまよう雪庇」が自己の「時間」であり、明確な方向性さえ見えてこない冬の時間が、詩の歩みに、影を差しているのである。

第四詩節では、第一詩節で用いられた形象が再び取り扱われている。そして、それらの形象の間に「両手」(V. 20, 22, 23)が挿入されている。この「両手」は詩を書く手であり、形象の間に入り込み、詩を作成しているプロセスでも示しているのであろう。しかし、第一詩節と比較しても、宗教性が失われて、その措辞にまとまりがなく、言葉が断片として取り出されて、詩の展開に連続性が欠けている。このような連続性を欠き、個々の形象が断片的に取り出されているような詩が、新しい「詩」の形なのであることを示しているのであろうか。また、ここで「両手」によって取りあげられている形象こそが、この詩の表題になっている「ブルターニュのマティエール」ということであろう。書きつけると同時に消え去るような言葉の中で、第一詩節の詩句がそのまま残されているのがある。それが、「その / 血の帆が / おまえに向かって進む」(V. 23-25)のである。第一詩節では一詩行(V. 6)であったこの詩句が、三つの詩行に分かたれている。第二十四詩行は“Blutsegel”の一語が一詩行を形成している。ベッセンシュタインは、それを「死をもたらす者」として「死へと駆り立てる時間の緊迫性を視覚化している」と解釈している²⁰。

先述したように「歌」(Gesang)という副題が付けられただけで、日付のうたれていない初稿は、第一詩節と最終詩節にあたる箇所のみが記されている。この最終詩節は、“du lehrst”と“deine Hände”の詩句が繰り返されているばかりである。詩行が次第に膨れていき、“schlafen”(V. 31)が一行ずれて孤立したままになって、この詩は終わっている。しかも、この最終行は句読法が施されておらず、最後にピリオドもつけられていない。ベッセンシュタインは、詩行の波のような動きに、押し寄せる海のような連禱形式の「祈り」を思い起こさせる、としている²¹。この最終詩節はさらに繰り返されていくのであろう。

「両手」に「眠ること」を「教える」ということで、何を表現しようとしているのであろう。詩を書く「両手」が「眠る」のならば、それは詩が終わることを示している。しかし、連禱のなかで、最終詩節の各一行が、繰り返して唱えられていくとすれば、いつ「両手」は眠ることになるのであろうか。ピリオドがないのである。

IV. おわりに

1954年に成立した詩「ブルターニュの海岸」では、第二詩行の「おまえに そしてぼくに 別れを告げるため」(zum Abschied von dir und mir:)が理解できなかった。「ぼくたち」(wir)

がこの詩の世界をおおっている。それなのに、「我」と「汝」それぞれと訣別しなければならないのは、どうしてなのか。ジゼルと結婚して一年九ヶ月経った頃である。戦後、ツェラーンにとって、「生活」を得る最初の契機であったと考えられる。この詩の成立の後であるが、エーリックの誕生とともに家庭生活が成立し、ツェラーン自身もこの生活を守るべく努力していたように見える。そうであるならば、この詩句は、「我々」ということにおいて、今までの「自己」への訣別を意味しているように考えられてきた。ジゼルとの新しい生活の歓びが根底に流れているのではないかと。

ツェラーンが、その生涯で翻弄され続け、自殺する最大の原因となったと考えられるのが、「ゴル事件」(Goll-Affäre)である。この事件は、イヴァン・ゴル(Yvan Goll)の未亡人クレール・ゴル(Claire Goll)が、イヴァン・ゴルの詩句や形象をツェラーンが剽窃していると告発した、ツェラーンへの誹謗中傷事件である。ツェラーンの神経は、常にこの事件の経緯に集中しており、それが彼に狂気を生み出すことになったと考えてもよいであろう。この事件の萌芽は、1953年8月にクレール・ゴルが一部の出版社や作家に、対比箇所をのせた回覧文を送りつけたことから始まる。ツェラーンがこのことを知ったのは、翌年の6月であった。この事件はこの後、大きく展開して、1960年前後にはドイツの文学界を大きく揺り動かすことになっていく。

「ブルターニュの海岸」が書かれた頃、ツェラーンは誹謗文書の事実を知っていたであろうが、彼の生活や試作に、その影を見出せない。新しい生活への期待が第一義のことになっていたのであろう。

この問題がさらに先鋭化するのは、1956年3月のことであった。クレール・ゴルの策謀であるが、匿名の誹謗文書が、本人も含めて、出版社に送りつけられることになった。

詩「ブルターニュのマティエール」の第一詩節、第二詩節に、その「マティエール」が示されている。第三詩節で「詩を書く」ことを示す「両手」が現れて、第四詩節では、その「両手」が第一詩節の「マティエール」の間に入り込み、その「両手」が「マティエール」を再編成することで、新たな詩を創るプロセスが示されている。書き改めていく第四詩節で、三回登場する「両手」は忙しそうに働いているように思える。その働きによって、詩の言語は分断され、連続性を失い、断片として取り出されてくる。詩語が削られていくなかで、「両手」の饒舌さが感じられる。ツェラーンの晩年の詩における、断片化された詩語と、そのなかで研ぎ澄まされたような詩語の措辞を考えれば、ここで示されている「両手」は、これ以後のツェラーンの詩作の方向性を示すのかもしれない。

そして、この詩が作成された時には、クレール・ゴルの先に誹謗文書のこと、ツェラーンの神経は向いていたであろう。この後に大きく展開していく「ゴル事件」にツェラーンは翻弄され、反ユダヤ主義と絡めながら、それに集中していたかれの神経は、消耗していったのである。

1960年の夏に次いで、1961年の夏の休暇も家族とともにトレバブで過ごす。その時に書かれた「ブルターニュ連作詩」の最後の詩の第一詩節は次のようになっている。

Ich habe Bambus geschnitten:
für dich, mein Sohn.
Ich habe gelebt.²³

わたしは竹を切った。
おまえのために、わが息子よ。
わたしは生きた。

現在完了形で書かれた詩句に「生」を断ち切ったような意識が感じられてならない。この年の秋に、重い精神障害に陥ったことを考えれば、この時には既に、ツェラーンの神経は破壊されていたようにさえ感じられてくる。大切なものを、希望さえも失われている自己を感じていたのであろう。破滅した人間にできることは、自己の内にある絶望を言葉で表現することであり、そこに、かろうじて存在を主張するかすかな息づかいを、われわれは、認めることとなる。

1960年、61年は、ツェラーンの人生を決定づける大きな事象が次々と現れた。それ以前の、ここで取りあげた二つの詩には、喜びが感じられ、新しい詩作を試みているツェラーンの姿が認められるのではないだろうか。また、詩の言葉によって削られ、痩せ細っていく現実を見据えていたのかもしれない。

(2013.8.1)

注

1. Celan, Paul: *Gesammelte Werke* (GW.と略す). Bd.1, Frankfurt a.M., 1983, S.253-264. 「明るい石たち」(Die hellen Steine)、「アナバシス」(Anabasis)、「ブーメラン」(Ein Wurfholz)、「ハウダラー」(Hawdalah)、「メンヒル」(Le Menhir)、「サーカスと城砦とともにある午後」(Nachmittag mit Zirkus und Zitadelle)、「日のあるところで」(Bei Tag)、「ケルモルヴァン」(Kermorvan)、「わたしは竹を切った」(Ich habe Bambus geschnitten)の九つの詩を示す。
2. Celan, Paul: *Die Gedichte. Kommentierte Gesamtausgabe in einen Band.* (KG.と略す) Herausgegeben und kommentiert von Barbara Wiedemann, Frankfurt a.M., 2003, S.627.
3. Celan, Paul: KG., S.655.
4. Celan, Paul: GW. Bd.1, S.99.
5. Celan, Paul: *VON SCHWELLE ZU SCHWELLE*, Tübinger Ausgabe, Herausgegeben von Jürgen Wertheimer, Frankfurt a.M., 2002, S.34f. 詩の成立について、また文献学的な事項や地勢的な事項については、この『チュービンガー版』と注2の『注釈版全集』に依拠する。(627～628ページ)。以下も同様。
6. 注5の『チュービンガー版』では‘Pointe de Toulinguet’となっているが、地図の表記では‘Pointe du Toulinguet’である。『注釈版全集』でも地図の表記が使われている。(下

線は筆者)

7. 昨年(2012年)の9月2日から4日まで、沖縄国際大学の特別研究費の助成を受け、筆者はこの地を訪れた。カマレ・シュール・メール(Camaret-sur-Mer)を起点にしたトレッキングコースとして整備され、多くのレジャー客が訪れている。尾根筋のようになった海沿いの岩の上には、第二次世界大戦中に、ナチスドイツが造った砲台やトーチカの残骸が点在している。また、近くにメンヒル群もあり、ケルト文化の痕跡も見られる地であった。
8. 第二詩行のツェラーンによるフランス語への翻訳は“pour nous dire adieu”(wörtli.: um uns Adieu zu sagen)となっている。Vgl. Celan, Paul: VON SCHWELLE ZU SCHWELLE, Tübinger Ausgabe, S.35.
9. パウル・ツェラーン:『関から関へ』(飯吉光夫訳)、東京、思潮社、1990年、124ページ。
10. Celan, Paul: GW. Bd.1, S.171f.
11. Celan, Paul: SPRACHGITTER, Tübinger Ausgabe, Herausgegeben von Jürgen Wertheimer, Frankfurt a.M., 1996, S.48f.
12. Celan, Paul: KG., S.656. この詩の解釈において、多くの事項についてこの「注釈版」(655~657ページ)と『チュービンガー版』に依拠する。
13. Lehmann, Jürgen (Hesg.): Kommentar zu Celans » Sprachgitter 《, Heidelberg, 2005, S.268. Kommentar zu ‘Matière de Bretagne’ von Bernhard Böschstein, S.268-76. この詩の解釈にあたっては、ベッシェンシュタインの注釈も参照する。
14. 注13と同じ。ベッシェンシュタインの注釈には、ツェラーン自身が翻訳したフランス語の単語リストが反映されている。
15. Vgl, KG. S.656. Tübinger Ausgabe, S.40.
16. 注12参照。Böschstein, Bernd: a.a.O., S.268f.
17. 参照:『独和大辞典』(国松孝二他編)、小学館、1990年、866ページ。旧約聖書の「出エジプト記、9章22~23節」が例文として引用されている。“Da sprach der Herr zu Mose: Recke deine Hand aus gen Himmel ... Da streckte Mose seinen Stab gen Himmel ...” Vgl. Deutsche Bibelgesellschaft: Lutherbibel Standardausgabe, Stuttgart, 1985, S.68.
18. 「その血の帆」は、先の「茨」と結びつけて、十字架に架けられたキリストの屍骸を包んだ布であり、「死」に赴くシンボルになっている、というように、非常勤教員のドイツ人の友人が解釈してくれた。「トリスタンとイゾルデ」の伝説では、暗号として表示される帆の色は「黒」と「白」であるからである。
19. 注12, 参照。Böschstein, B: a.a.O., S.272-4.
20. Böschstein, B: a.a.O., S.274.
21. Böschstein, B: a.a.O., S.275.
22. アメリカのゲルマニスト、リチャード・エクスナー(Richard Exner)の言辭をかりて、イヴァン・ゴルの詩集『夢草』(Traumkraut)とツェラーンの詩集『芥子と記憶』(Mohn

und Gedächtnis) との間の対比箇所を示し、ツェラーンを「泥棒」と呼ぶ文書をクレール・ゴルは送った。Vgl. May, Markus / Großen, Peter / Lehman, Jürgen (Hrsg.) : Celan Handbuch, Leben-Werk-Wirkung, Stuttgart-Weimar, 2008, S.20f.f..

23. Celan, Paul: GW. Bd.1, S.264.